

歴史・文化サイトカード

通しNo.		1-C-3	更新日	2025/2/10
サイト名		<small>てんぐやま</small> 天狗山が発祥とされる出雲の國の大社～熊野大社 <small>くまの たいしや</small>		
基本情報	区分	<input checked="" type="checkbox"/> 有形 <input type="checkbox"/> 無形 <input type="checkbox"/> その他		
	所在地	松江市八雲町熊野2451		
	指定別			
	種別			
	指定/登録年月日			
	管理団体/モニタリング			
	周辺施設/アクセス	<input checked="" type="checkbox"/> トイレ <input checked="" type="checkbox"/> 売店 <input checked="" type="checkbox"/> 飲食店 <input checked="" type="checkbox"/> 駐車場(台)		
留意点				
サイトの解説	歴史・文化	松江市の南、八雲町の意宇川の上流に鎮座する旧国幣(こくへい)大社。祭神は、熊野大神櫛御気野命(くまのおおかみくしみけぬのみこと)、またの名を素盞鳴尊(すさのおのみこと)としている。境内摂社として、本殿左面(向かって右)に稲田神社、右面(向かって左)に伊邪那美神社を祀っている。 『出雲国風土記』に「大社」となっているのは、熊野大社と杵築(きづき)大社だけであり、「大神」と称されているのは熊野大神と杵築・佐太・野城の四大神だけである。 例祭に特殊神事といわれる「鑽火(きりび)祭」がある。それは、出雲大社の新嘗祭における火を起こすために、熊野大社が新調した火を起こす道具である火鑽臼(ひきりうす)と火鑽杵(ひきりぎね)を出雲大社に渡す儀式である。祭りの日、出雲大社から国造以下数人の神職が受領のために長方形の餅を携えて参向する。この餅と引き換えに発火器を受け取るのだが、熊野側では「亀太夫」という社人が、餅に難癖をつけて、さんざんに抵抗した末に負けるとう悪態祭が行われる。これによって相手の大神の威力が逞しいことを顕彰するのである。熊野大社には、この発火器を祀る鑽火殿が境内に左側にある。		
	地形・地質、生物・生態等	『出雲国風土記』によると、熊野山の条項に「熊野大神の社す」とあることから、現在の天狗山(標高610m)が熊野大社発祥の地とされている。天狗山は、下久野花崗岩(およそ3600万年前)を基盤として噴出した安山岩体(波多層形成期;およそ1800万年～2000万年前)からなる。下久野花崗岩の周囲は後期白亜紀から暁新世にかけての花崗岩が分布しており複雑の基盤構造をなしている。この構造のなかにある天狗山は、松江方向へ延びる中新世堆積盆地と荒島方向へ延びるそれとの接点をなす山ともいえ、農耕に不可欠な水源地形成につながっている。すなわち、古代史研究では、「熊野」のクマは神という言葉の転化で、稲穂や穀物の神と理解されている。いわば熊野大社の神は穀霊ということである。意宇平野には穀物を生み出す水耕地であり、その大地を潤す水は意宇川の源流域にある熊野山=天狗山として崇められた。一方、天狗山の東は飯梨川水系となっており、安来平野を潤す。5世紀前半に出現する大型古墳は、水源地として天狗山を共通の神として祀った古代社会の存在が指摘されている。天狗山の頂上近くにある磐座は無斑晶安山岩で、周囲は崖錐になっている。 また、天狗山の山頂付近には、当地では稀なブナの大径木が残存している。		
写真・図等				
	熊野大社		天狗山にある熊野大社跡地	
参考文献	井上多津夫(1990)松江市南方の前期中新世安山岩溶岩の流動方向と噴出源。地質雑, vol. 96, p. 641-651. 井上多津夫(1990)荒島湾入部の下部中新統一(第1報 北部地域)ー;(1991)同(第2報 中部地域)ー。島根県立工業技術センター研究報告, no. 27, p. 9-18; no.28, p.51-56. 鹿野和彦・山内靖喜・高安克己・松浦浩久・豊 遙秋(1994) 松江地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所, 126p			